九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

尾形亀之助と北川冬彦 ： 「詩神第三回座談會」記録の紹介（『尾形亀之助全集』未収録）と「童心」論争の考察から

岩下，祥子
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

https://doi.org/10.15017/25418

出版情報：九大日文. 19, pp.41-63, 2012-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

尾形亀之助と北川冬彦

――「詩神第三回座談會」記録の紹介（『尾形亀之助全集』未収録）と「童心」論争の考察から――

岩下 祥子（IWASHITA Shoko）

はじめに

尾形亀之助の文筆によって書かれた作品の殆どは『尾形亀之助全集』（以下『全集』と略記）に収録されており、一九七〇年九月に刊行された最初の『全集』と一九九九年十二月に刊行された増補改訂版の二冊によって、読者は尾形亀之助という詩人を〈知る〉ことが出来る[1]。一九七〇年版の内容について両全集の編者である秋元潔は「既刊三詩集の全編と未刊詩篇、雑纂、短歌で成り、詩のほかに評論、小品、エッセイ、無声映画シナリオ、夢譚を網羅した本格的な全集」[2]と説明しており、増補改訂版は先の全集刊行時には未発見であった尾形亀之助の作品が収録されている。『全集』本編に関して言えば増補改訂によって内容が更に補強されたのであるが、一九七〇年版『全集』には後の『全集』には付されなかった別冊の「尾形亀之助資料」があり、内容は「高村光太郎、草野心平、北川冬彦、吉田一穂、岡本潤、辻まこと、秋山清、辻潤、小森盛、矢橋丈吉、戸田達雄の尾形論、尾形の書簡、「月曜」四号表紙と編集後記および奥付、マヴォ資料、「詩神」座談会記事」[3]と説明にあるように、尾形が会話によって「詩」を語った座談会記事も収録されており、『全集』を多彩に補う資料となっている。しかし、昭和五年に「詩神」の企画によって行われ、尾形が参加した座談会には「詩神第三回座談會」（「詩神」第六巻八号、昭和五年八月）と「詩神第四回座談會」（「詩神」第六巻第十号、昭和五年十月）の二つがあり、「尾形亀之助資料」に収録されたのは「詩神第四回座談會」のみであった。

本稿では二冊の『全集』本編と別冊「尾形亀之助資料」に収録されなかった「詩神第三回座談會」（以下「第三回座談會」と略記）を掲載する。座談会記録は尾形の創作作品ではないが、会話文という特色によって尾形の詩に対する考えを別の角度で捉えることが出来ると言えるだろう。また、同時代の詩人達による詩論の討議は、当時の詩の風潮や社会への態度を読み取る重要な手掛かりでもあり、「詩神第四回座談會」と同様に尾形亀之助の詩の鑑賞を深める資料として「第三回座談會」をここに紹介したい。資料紹介とともに、出席者の一人である北川冬彦との詩想の相違を「第三回座談會」での発言を踏まえて検証し、一考察を試みる。座談会は七名の詩人が集って行われているが、本稿は尾形亀之助研究を主眼に置き、考察を進めた。なお、本稿における〈「童心」論争〉とは詩誌「詩神」において昭和四年から五年にかけて北川冬彦と尾形亀之助の間でなされた論争を指す。以下、資料紹介、論考という順序となっている。紹介する資料は原文のまま、旧字体を用いた。

詩神第三回座談會

尾形龜之助・萩原恭次郎・北川冬彦
岡本潤・杉江重英・田中喜四郎・宮崎孝政[4]（順序不同）

田中。ぢやこれから始めます。今日はお暑いところを有難うございます。今日の座談會は現日本詩壇の檢討座談會といふやうなことで、いろ〳〵とご意見を承りたいと思ひます。詩人の對社會的態度、と言つては餘り漠然ですけれども、さう言つたことからボツ〳〵始めて頂きたいと思ひます。萩原君どうですか。

萩原。詩人と言つても、プロレタリヤ詩人の對社會的に決定された上から、詩作だとか生活をやつて居りますが、一般的なものは決定されて居りません。だがさういふ人々が體系にして居る社會と密接な關係がありませう。だから、さういふ種々な複雜な層を持つて居る關係から詩人がどんな詩作をやるか、發展して行くかといふ問題ですね。

尾形。けれども、さういふやうなときに殊更に詩人的といふのは、僕は非常に問題だと思ふのです。つまり副業といふか、何か外に職業があつて詩を書いて居る人と、さうでない人を……つまり外に職業のないヘボ詩人は乞食みたいなものですからね。一般に詩人といふ者は生活保障が詩を書くだけではついてゐないのですからね。

田中。さう言つた切迫つまつた生活をして居る人が割合に多いと思ふ。詩集一冊出せば詩人となつた、といふやうなことで社會に對して居る。作品でもさう言つたものが現れる。これは文學の方でも、プロレタリヤの方は別として違ひはないではないかね。

萩原　まあ、詩人で原稿料なんか取れるのは勿怪の幸いだからね。

（哄笑）

尾形　貰ふとゴシツプの例の莫大な收入といふことになるんだね。

（哄笑）

萩原　しかし、原稿料の問題は別にして、どんな詩人でも社會的關係といふやうな問題には、ぶつ突かつてゐるんだ。その詩がこほろぎの詩を作らうが景色の詩を作らうが、どういふものを書かうが、矢張りその詩人も作品の上ではなくても、人間としての自らの生活といふものは持つて居りますから、それらの社會的關係がどういふ社會組織の上に於て決定されてゐやうとも……さういふ矛盾それは大きいよ。今後益々いろ〳〵な點から。

田中　杉江君どうですか。

尾形　詩人の社會的立場といふものは、どうにも言へないですね。つまり僕なら僕が駒澤といふ所に住んでゐて、詩神なら詩神に詩を書いて、十五圓なら十五圓貰つて居るとするとそれはそれだけのことであつて、極く近い例だけれども、隣り近所だとかそれから出入のそばやだとか、煙草屋だとか、さういふものには自分が「詩人」であると或る人達に稱ばれてゐるといふこ

とに何の關係もない。つまりはそれらの人達から見て自分が詩人であるといふことは、どうも髪の毛が長いと言つたやうな程度で、あとは拂ひが惡いとか家が汚いとか、そんなことのものでしかないかね。（哄笑）

岡本　詩人といふものは失業者みたいなものだね。

杉江　手近に、自分に例を取つて言ふのですが、僕は僕の詩を見た或る一部の人から、君の詩は非常に生活的ではない。非常に生溫いと言はれることがよくありますが、自信の氣持から行くと、さういふことを言はれるのはそれらの人達からみて、至極當然とは思ふのですけれども、しかし僕自身としては、自分の生活に一生懸命になればなるほど、反射的に生活からうんと懸け離れたやうな詩を書きたくなることもあるのです。自分の生活に一生懸命になつてゐる人であれば、あるほどさういふ場合はあり得ると思ひますね。だからその人の生活を見ないで、その人の書いたものだけをしかも一面的にだけ見て、生溫いとかなんとか頭から言つてのけてしまふことは、本當に親切な見方ではないと思ふね。

尾形　しかし、それに關心する必要はないのです。

杉江　別段關心はしないのですけれども、しかしさういふ風に單純にしか物を見て貰へないといふことは淋しいことだし、第一困る。

萩原　けれども、それは仕方ないと思ふな。少くとも一人なら一人の詩人が世の中に、只好きだといふ意味でつくつてる以上君の詩が好きだといふものがあれば、それはめつけものであつて、さう一人の詩魂といふものが、ザラに誰にでも分るといふわけには行かないのだから。

杉江　しかし、これはたゞに僕の場合ばかりではなく、さういふ風に言はれて居る人も、あるやうですから。結局僕だけの問題ではないだらうと思ふのですがね。

尾形　あの人の詩は好きだと言はれた當人はさうした場合嬉しくないことはないでせう。

宮崎　君の（杉江氏に向つて）詩などは一見無關心のやうに見えても君自身が社會の一員であり、さうしてその社會に生棲してゐる以上觸れてゐるものにはどうしても觸れてゐるのだ。そして、それをどう扱つてゐても君を批難出來ないのだ。彼岸の人々から非常に遠ざかつてゐるやうに君が考へられても、君は君らしくゆけばいゝと思ふ。

杉江　しかし、これは決して愚痴ではないのだ。

宮崎　社會人として君が認めて貰へないからといふ惱みがあるのではないか。

尾形　けれども、さういふことの反對に例へば有名な詩人が、タゴールでも福田正夫でも誰でもいゝのですが、さういふ人が朝日講堂で講演をするとしますね。さういふ事柄が「詩人」の一つの社會的な何かであるといふ具合に、多くの人からは思はれて居るわけなんでせう。

宮崎　さうです。

尾形　さうすれば、さういふところに出演する機會のない多くの詩人にとつて、それが彼等を代表する一つの對社會的な現れで

はないのですかね。だから杉江君の、さういふことの反對のことでも僕は矢張り同じだと思ふ。

萩原　社會的現れと言へば……僕はかうだと思ふのです。エライと云はれる人が、社會的に偉くなつたといふ社會と、さういふものをちつとも偉く思はないもう一つの社會的なものがあると思ふね。

岡本　僕は、死んだ人のことを言つても變だけれど、生田春月の晩年に書いてゐた詩には非常に無理があると思ふのです。それは僕が春月氏に遭つたときもさう言つたのだけれども、あの人は自分の社會的態度といふものを無理に決めやうとしてゐたのではないかと思ふのです。それで自分の現在の位地と、決めやうとする社會的態度にギヤツプができて來て、その埋め合せといふわけでもないがツケ元氣のやうな詩を書いてゐた。だが、あれは非常に無理があつて本當の態度でないと思ふ。矢張りもつと僕はその人の、なんといふか内側から自然に起つて來たもの、自發的なものが形をとつて來ないと無理になると思ふ。だから杉江君の場合だつてそれを無理にはたからどうしろ、かうしろと言ふのは無理だと思ふ。僕といふ個人にとつては、僕の社會的態度といふものは、自分で決つて居るつもりだけれども、それは俺はかう生きるといふことだけで、外からとやかく强制されるべき性質のものではない。無理をして居る人を見たときには、どうも無理なところが目立つものだ。生田氏の場合なんかもさういふ無理をせずにもつと素直に動いて行けやしなかつたかと思ふんだが……社會的態度にしても、何にしても。

杉江　僕はこんな考へですね。驅り立てる詩もいゝし、煽り立てる詩もいゝし、働き動かす詩もいゝけれども、その半面に、靜かに休ませてやる詩もまたあり得ていゝとその中に暫くでも氣持を落付けることのできるやうな詩も、ザワ〳〵した今の世の中には、又何かの役に立つのではないかと思ふな。

岡本　立たなくても構はないでせう。

杉江　しかし、立つ立たんといふことになると、やはり役に立つて居るのではないかね。役にたゝんより立つた方がいゝ。

尾形　だから立つ立たないのは問題でない。（作者にとつてはの意）

岡本　それはまた別の問題だと思ふ。

尾形　例へばいま僕なら僕が非常に傑作ができそうだ。とさういふ場合に、蚊がこの手のところに飛んで來た。そのとき、そんなものを書くより蚊に螫されない方がいゝと考へた場合に、蚊といふもの一匹のためにそれを書かないで仕舞ふかも知れない。――といふことになる。さう考へると、その場合蚊と書かれた或ひは書かれんとする作品との比較からくる價値なんか考へる必要はないと思ふ。

杉江　僕自身として言へば、詩を書くとき、さういふことは何も深く考へてはゐない。考へてはゐないのですけれども、出來上つたものを第三者から見た場合について言つてゐるのです。

尾形　だから、さういふ意味でいふと、つまり今迄に殆ど何千萬といふ詩があるわけでせう。その中でどの位が殘つて居るといふこと（有機的無機的のすべてをふくんで）も興味のあることだし、又これから先に時間が無限にあるわけでせう。さうす

ると又それが殖えて行くに違ひない。けれども殖えて行つてもそれは結局何にもならないことになるのですけれどもね。

宮崎　杉江君のさつき言つたのは、つまり詩人が詩を書くといふのは、君が社會に對する役目のことを言つて居るのだらう。

杉江　さう言へばさうだけれども。

宮崎　さうして、岡本君や尾形君の氣持は役目以外のことの、もう一歩大切な現し、君自身が詩人であつてもいゝぢやないかといふことだらうと思ふが、さうでないかね。

杉江　詩人の對社會的態度といふことであつたから、さういふ風に考へたのですよ。

岡本　役目といふものはどうしても結果になつて來ると思ふ。結果を考慮する必要はないと僕は思つて居るのです。

尾形　だからその役目といふものゝ露骨な現れは、詩を書いたつて、その詩は五圓なら五圓、十圓なら十圓になつてそれを受取りに行く途中で、轉んで頭に瘤を出したとかいふ結果、それからその金を受取つて歸りに皆飲んで仕舞つたといふやうな結果、さういふ結果の方が可なり重大でないかと思ふ。（哄笑）だから作品と、その結果、それから得た結果といふ風に三つにも四つにも分れて行くといふやうに考へて居るのです。

岡本　自分で生溫いと思はなければ生溫くはないでせう。

杉江　たゞさういふ風に、單純にしか物を見ることのできない人があるのは困るといふのです。

尾形　それはさういふことを言ふ人のことでせう。

杉江　座談會ですから何でも思つたことを言ふのですが。

宮崎　君が生溫いなぞと考へてゐるものは、結果に於て强靭なものであつてほしい。結局それは君の作品を中心とした讀者達の頭の中で「生ぬるい」と思ふ出來事であつても、君自身はさういふ出來事に對して無關心であるべきだ。

尾形　作品を比べても杉江君のよりも僕のものゝ方が、さういふ意味で言ふとよけいに生溫いですよ。

萩原　杉江君が社會、社會といふのは、社會的なプロレタリア・イデオロギーといふやうなものを含めた社會に對する考へからではないのですか。唯全體の社會といふものでなく、さういふ風な社會を頭の中に入れて、さうして社會的といふことを考へて居るのだと思ひますね。

杉江　或は言ふ人がさういふ風に決めて居るのかも知れないね。

（北川氏出席）

萩原　社會的といふのにも一口に言つて二た通りあるからね。ある者には神様みたいに言はれて居る社會的な態度もあるし、ある者からは野良犬のやうに思はれると云ふ社會觀の開きもあるのだから、朝日講堂で若しある詩人が講演會をやつて、それが社會的であるには瞭に社會的であるがそれも解釋のしやうだと思ふ。……さういふ場合に話を聽きに行つて、感心して歸つて來た人達には、それが一つの社會的態度を瞭にしたものであるし、しない人には成り立たないといふことになるわけですね。だから悲しいかな一つに社會的と云ふ觀念をもつて全部

決めて仕舞ふわけには到底行けないと思ふ。只、今までは詩人の社會的といふことは、社會の動向にはそんなに問題にせず、只商品的におつ立てられてゐたといふ事になりませう。社會的といふことだけなら詩人に限らずどんな人間も現社會の組織の下にある、社會性をもつてゐるのだから、だが今までの社會的といふものに價値があり得るやうに考へてゐたのが、一般の詩人の考で叉さういふところに詩人の社會的位地といふものをつくらうとしてゐるのではないかと思ふ。今後はその人が單に詩を書いて居るといふに過ぎないけれども、詩人の社會的位地といふことは今までの反對の位置から考へて來られなければならないと思ふな。

北川　萩原君がいま言はれて居るやうな意味では、詩人の社會的位置とかいふことゝは問題にならないと思ふね。

萩原　どこがです。

北川　所謂社會的位置といふ意味では。

萩原　一般にはさういふ考へが未だに殘つて居る。それでその話が續いてあつたのですから……兎に角詩人といふても、初めからさういふ座り心地の好い椅子が特別にあつたわけではないでせうけれ共、唯さういふものが種々な社會的關係からあらしめられた場合。その詩人は社會的位置といふ事をも一度吟味しなければならない。若し問題があつて進められるなら、かゝる吟味の後になされべきだと思ふ。

尾形　だから、それをいろ〳〵な風に考へられて居るのです。曾て詩人であつたことから、それを土臺にして何かうまい食ふ途が出來たといふやうなことがあると、その人も矢張り大家と同じく詩人であるといふやうな風にも考へられて來ますね。

萩原　しかし、まあ原稿料で生活ができる詩人の社會的位置といふ場合は別にして、叉現在に於てまるで一文も原稿料も入らない詩人にも、社會的位置といふものはあるでせう。今は漠然としてゐるかも知れないが、只詩人なんて名前はもと〳〵便宜に詩を書いたもの或は饒舌つたもの、さういふものに社會の人が、名譽でもない社會的位置といふものを貼つておけといふ位のものなんだと思ふなあ。

尾形　だからそれが問題なんだよ。だから僕は一つのものを書いた、その書いたものに對してこれは詩だといふことを誰かゞ言つた。その爲にその人が詩人だ詩人だというふことになつて、何を書いても詩人だ詩人だといふことになると困ると思ふ。（哄笑）つまりあれはあゝいふものに書いて居るけれども、それが詩でないといふやうなことを言はれて、當人が詩のつもりで書いたものでないものにまでそんな風に反對に窘められるやうなことになつて來る。

田中　さういふことが澤山あるね。

萩原　そんなやうなヘンなことで成り立つて居るのが現在ではないかね。そんな漠然たるもので。

北川　これからは段々そんな考へ方は一般からなくなつて行くと思ふ。現に行きつゝある。

尾形　さうでせうな。

田中　一般に詩人といふことを非常に特別に思つて居る人があ

ると思ふね。

萩原　さういふ漠然たるものはとれてゆくだらうが、詩人の生活態度がロマンチツクだけではゐられないから、もつと社會の政治的なもの經濟的なものに觸れて來るから社會的位置といふやうなものは反對にもつと露骨になるだらうと思ふ。

尾形　けれども僕の言ふ意味は、詩集があまりたくさん出版されるので不愉快だといふ人もあるが、それはそれに關心して居るから言ふことであつて、そんなことは構はないと思ふ。ちよつと詩を書けば詩人だと大きなことを言ふ、といふやうなことを言ふ人があるけれども、さういふことに關心して居るから言ふので、關心してゐなければ誰が詩人だつて構はないと思ふ。

萩原　お歴々の社會的位置なんかどうだつていゝけれども、社會といふものがだん〴〵對立的になつて行つて、その對立が激しくなればなるほど、双方の社會に於てさういふ確乎たる位置を持つ人が出て來ると思ふ。だから今迄の原稿料で生活できてゐた詩人といふものと、内容は違ふけれども、社會的立場といふものは出て來ると思ふ。

尾形　だけれども、さういふことは例へば僕なら僕が八百屋をやつてゐて、今度八百屋を止めて魚屋になつたといふ場合に、もう誰も僕を「八百屋さん」とは言はない。それほどはつきりとした生活はないわけでせう。（哄笑）

萩原　八百屋さんだつて魚屋さんだつて、それは問屋の魚屋もあるし、舁いで賣つて歩く魚屋さんもあると思ふのです。

尾形　イヤ僕は名稱を言つたのです。（詩人が詩人でなくなるといふときの意味で）

萩原　名稱はいくら變つても、これからは益々名稱を頭の上に振りかざしてこんがらかして來るものも出て來ると思ふ。だが魚屋さんになつたあんたと今の無職のあんたとは經濟的、肉體的に變つて來る、魚やさんになつたからと云つてあんたの詩がイセイの好い猛烈な詩になるとは僕には考へられない。自分の主張をもつた人はどんな所に行つたつて、そのスピリツトは變らないと同様……

岡本　詩人といふことは一つの惰性みたいになつて居る。

尾形　僕は、いつか「詩」といふものは傳説だと言つて叱られたことがある。

萩原　つまり前はどうであれ、今は今、いま詩がある限りは詩人といふものは社會的關係といふものもあると思ふ。

尾形　けれども詩といふものは非常に變つて來ると思ふ。

萩原　今までの詩人のやうに可なり自分を中心にして、詩人々々といふ考を、もつと社會的認識の下にそれを關係して出て來るのではないかと思ふ。

尾形　だから詩といふものは變つて來て居ると思ふ。

萩原　既に變つて來て居る。

尾形　昔は詩と言はれたものが現在は詩ではないと思ふ。だから詩といふものは書かれる文章の形式によつて決定されるのではないかと思ふ。

萩原　それでいま杉江君の話をしやうとして思つたのですが、杉江君のやうな詩を書いて居つた人も、いま尾形君が言つたやう

な社會が變つて來るほど詩が變つて來る。同じものを詠はうとしても詩が變つて來る。だからあなたが風景なら風景を詠ふ詩と、十年前の人が風景を詠ふ詩は、非常に雰圍氣とか狀態とか、そのものに接したときの感情などが全然違つて來ると思ふ。

尾形　昔は、さういふ見解は持つてゐなかつたに違ひないのですね。

宮崎　要するに詩人の社會的態度も、魚屋の態度も、うどん屋の態度も結局變らないのですからね。別に詩人といふ人種のみの態度が、他の社會の人の態度と、これつぱかりも違つて居ることはないのですから。

尾形　一般的に生きて行く上では同じだね。

萩原　詩人といふことはうどん屋であれ又吾々であれ同じだと思ふ。それをやつてゐても詩を書ける一つの技術者だね、書かうとするものを持ち或は書かねばゐられない感じを持つた人が、書いて發表して始めてさういふ人は詩人といふ位置が得られる。それ以外に人間的にどう詩人が偉いとか、うどん屋が偉くないといふことは問題でない。

尾形　さうは決められない。うどん屋だつて詩を作られないわけでないから。（「うどん屋」といふものを對立的に例にひくことさへ出來ぬの意味らしい）

宮崎　うどん屋の頭だつて案外鋭敏なのがあるよ。

萩原　うどん屋の頭が此處にゐる誰よりも鋭敏であつたりすることはたま〳〵以上にあるだらうよ。問題はそこに詩をどうするかしないかといふことだけだね。

宮崎　外に何か問題が新しくないのか。

北川　詩人の社會的地位といふ問題が出てゐるので思ひ出すが、尾形君、君はいつかこの雜誌で僕が出世を氣にしてゐるとかなんとか書かれてゐたやうだけれど、僕の所謂社會的地位についての考へ方はさつき言つたとほりなんだ。

尾形　しかし、あの場合の妙な言ひ懸りは、いま更めてどうかうすることはできないよ。

北川　しかし、僕はあれに對して返事をしなかつたから、この際僕の立場を一寸辯明して置きます。

尾形　さうして置く方がよいでせう。

田中　ではその問題はこの位にして頂きまして……。いま非常に日本の詩壇は内容外形ともに、みな轉形期にあると思ふのです。さういふ場合に於ける詩の形式とか或は詩の取材とかいふことについて、何かお話を聽きたいと思ひます。

尾形　北川君のやつて居られる詩現實といふのは、あれはどういふものですか。題材などは在來と同じですか。

北川　在來といふと漠然としてゐるが、題材はもちろん變つて來るべきだと思ふ。（「詩・現實」は僕一人でやつてゐるのではない。）（後記）

尾形　するとどういふやうな……

北川　これからの詩人の眼は動いてゆく切實な現實に向けられなければならないから題材はどんどん變化する。從來のプロレタリアの詩人は、眼の向け方に於いては間違つてはゐない

かもしれませんが、作品の仕上げに對する技術がまづいと思ひます。

尾形　さうすると、それに對して「これは一九三〇年の世界の眼であり頭腦であると共に明日を創り出す手である」――かういふその人達が言明してゐる場合にですねつまり一九三〇年の中にかういふもの（「詩現實」といふやうなもの）があるといふ考へ方で、つまり他の色々なものがあると同じやうにそれもあるといふ第三者のそれに對しての考へ方は間違つて居ると言はれるのですか。

北川　……

尾形　例へば玆（「詩・現實」の廣告文）に、一九三〇年の世界の「眼」であり「頭腦」であると共に明日を創り出す「手」であるといふのがあるが、仲間の人達は、これからの詩といふものはこれでなくちやいかんといふ主張を持つて居るわけですね、この中に。だから一九三〇年といふ年にかういふものがあるといふ私の考へ方は、あなた方にとつてそれどころではなく、これを最も尖端的なものであると主張して、誰でもがやらなければいけないといふ考へですか。

北川　大體はさうですけれども、しかし、あれを文字通り取り上げられては困ります。

萩原　つまり北川君がプロレタリヤの技術がまづいから吾々は技術の鍛練に「詩・現實」を出すといふのですね。

北川　「詩・現實」は一つの方向は持つてゐますけれども、これからのものであつて、いまはつきりしたことは言へません。たゞ、これだけのことは云へます。「詩・現實」は「詩と詩論」の行詰りから發した打開的存在であること。

萩原　勿論技術といへばプロレタリヤの詩だつて、あなた達がとつて居たやうな表現は、ある點で補へるものはあるでせうね。だがプロレタリヤ詩は絶對にその儘を「詩・現實」的の表現式を受入れることはできないと思ひますね。

北川　さうですね。アナキズムの詩人には優秀な技術を持つてゐる人がありますね。

萩原　北川君の言ふ優秀さでない優秀さがあるのではないかと思ふ。可なり北川君は技術といふものを唯物的に考へてゐるでせう。そこへ行くと岡本なんか、さういふ意味で行けば可なりまづい技術だと思ふ。

北川　僕はうまいと思ふ。岡本君の文藝月刊週刊號にのつてゐた詩の技術、あれなんかなか〳〵優秀だと思ふ。

萩原　さうですか。それが分つて來れば……。けれども技術に對しての解釋はここにゐるみながみな違つてゐるのではないかね。

宮崎　わけてプロレタリヤ詩の技術なんか、解釋が違つて來るのではないかね。

尾形　北川君などのやつてゐる「シネ・ポイム」といふものは、僕自身から見ると未來派の初期の作品とさう違はないかと思ふのです。あれだけでは。

宮崎　技術の方面ですか。

尾形　つまりあの書かれたものだけを見たならば、未來派の初

期のものとほとんど同じものです。拾ひ集めたフイルムを切つてペタ〳〵貼つて繫いだと言つたやうなものに思はれる。

北川　未來派の詩は僕ははつきり知らないのですけれども、未來派の詩は恐らく表現技巧だけから云つても、その方法は單なる羅列に終つてなかつたかと思ひますがね。僕なんかのは「組立（モンタージュ）」の方法によつてゐるのだから立體的です。その點だけでも違ふ。

萩原　未來派とは違ふだらうなあ。

尾形　イヤそれは僕のは多少（惡口批評がは入つて居るのです。）未來派も決して立體的でなくないし北川君のいふ「組立」も未來派はもつてゐた。

北川　もちろん、シネ・ポエムはまだ生れて間もない詩の一形式だから正しい道を歩いてゐるかどうかは早急に云へない。僕にもシネ・ポエムに危險のあることは判つてゐる。シネ・ポエムに大體二つある。一つは文字を材料とするシネ・ポエムと。一つは映像（フイルム）を材料とするシネ・ポエムと。

尾形　僕はそれらを總稱して言ふのです。

北川　僕達のやつてゐるのは文字の方を材料とするシネ・ポエムです。

尾形　――だから、さういふ場合にさういふものがあるといふ程度でやられるのだと、いゝと思ふ。唯、かういふものが一番尖端的である――かういふものが一番新しいといふやうな、さういふ詩に對する態度は餘りいゝものでない。

北川　新しいから新しいと云ふのはカマはんと思ふ。（後記）

さつき危險があるといま言つたが、僕らが文字を使つてシネ・ポエムを作る場合、フイルム的場面の方に賴つて了ふシネ・ポエムは正確をねらひながら結局文學としての正確さではなく、一つの場面的な對象の正確さですね。僕たちのやつてゐるシネ・ポエム運動にしろ「新散文詩運動」にしろ、それはいまゝでの詩に對する一つの醇化運動としてやつて居る。

尾形　（後で色々と書き加へられてゐるので、この間は間のぬけたものになりました。で、それが「運動」としてわるから う筈はないのは他の種々な同種類のものゝ運動と同じやうに。そしてそれらのものも出來上つてゐないと同じやうに――といふところから上へつゞくやうに讀まれたい！）

北川　藝術上の運動が生む一つの作品はそれ自身出來上つたものです。（後記）

宮崎　岡本の詩がまづいといふ話が出たが、岡本の持つて居る飛躍と力が缺けてゐる場合のうまさより、まづい方が本當といふ氣がする。まづいといはれる技術すら岡本の體質的なうまさになつてゐる。

岡本　よつぽどまづい體質に出來上つてるんだナ…（哄笑）

杉江　僕は決して岡本君の技術はまづいとは思はない。或ひは一番立派なものをもつてゐるのではないかとさへ思ふ。

北川　非常にむらがあると僕は思ふな。ともかく「文藝月刊」に載つて居た詩はよかつた。

宮崎　「詩神」七月号の No.1437（生活レビユー）をみると詩

を感ずるね。

萩原　だから「生活レビユー」の中にある、岡本が終の方の……

岡本　俺ばつかり問題にしなくてもいゝよ。

宮崎　少し窘められた方がいゝよ。

萩原　『たとへその富籤を引き當てたところでオコボレ日給が一圓五十錢だ。そのオコボレに向つて我が東京市の「知識階級」が雲集するのである。と云へば人事みたいだが、さういふ僕もその五千八百五十人の中の一人のNo.1437とは情ない話だ』つまりかういふところのカラクリを突き貫く所に岡本の取材がなくてはいけないと思ふ。勿論かういふところにもだな、岡本の飛躍の精神は一層欲しいと思ふ。岡本の詩まで行けば最もその事實に近いことをスラ〳〵とその儘に、はつきり取り上げることを一番の技術を思ふ。僕等がこれから論じやうとする投術論もそこにあるのです。ところがいま此處では大分岡本の評判がいゝけれども、それほどみんながどう思つて居るかちよつと僕には可笑いと思ふ。

宮崎　まづいことにきめるか。（哄笑）

萩原　そのまづいところに僕達の新しい理論の物があるだらふと思ふ。僕達の理論の最初に置きたいことです。

尾形　さういふ技術のことをどうかといふことは非常に難しいと思ふ。

萩原　つまり、いゝ詩を作る惡い詩を作るといふことは、さうゆう技術の中に、取材の正確の握み方によつて生れて來るのだと思ふ。

尾形　例へば杉江君の先月か先々月か詩の「おしめを乾してゐる」といふやうなやつは、あれなどはなかなかはいゝと思ふが、終の方にまた繰返して言つて居るところがある。あれは一つの技術の上から要らないと思ふ。

杉江　後の方が餘計なものだといふのですか。これは「旗魚」に出した「雨日異臭」といふ自分の詩に就いて尾形君が言つてゐるのである。（杉江後記）

尾形　技術の上から行けば餘計なものだと思ふのです。けれどもそれも杉江君自身が、それはある方が技術としてはいゝのたといふ考があれば、僕の言ふことは成り立たない――といふやうに、技術としてだからその技術に就ては言へ得るといふことになつても、上に述べたやうに結局はその人その人のかつてだといふことになる。

萩原　定つた表現形式は必要でない。けれどもプロレタリアが詩を書かうとするときに、誰でも心に持つて居るもので形に文字にならないものが妙にこんがらがつてゐる。この場合はこの人が詩としての技術を缺いてゐるといふに過ぎないと思ふ。

それでも詩が書けるといふことは、ひとりよがりだと思つて居ても書けない人がある。だから書かうとする人は必ず一つの技術を持つて書く。だからその技術は指令的な技術、尖端的な技術とか云はれる、さういふ特殊的な技術でないと思ふ。宮崎君が無技巧と言ふ事を云つたけれども、その技巧といふ

ものは技巧の上に技巧、その上にまた技巧、また技巧がある。さういふものが技巧だと思ふ。つまりプロレタリヤと特に云はなくとも好い詩は自分の持つて居るスピリツトと、紙の上に置かれた活字とが一番近い距離にあるのだ。それを最も正確に獲得しやうといふのが技術の點である。さういふ意味で岡本の詩なら岡本の詩がさういふところに近寄つて居る。それかと言つて誰も岡本のやうな技術が誰もにつくれるとは思はない。誰もが一番近く自分に持つてゐる、その心臓と紙の上の一番近いところにあるものを獲得する技術、それは今迄の商品的な技術、つまり技巧、虚構的な技術、技巧の上の技巧、技巧を重ねて來た技巧とは違つて來る。技巧の上に技巧その上に技巧を加へない限りは現在の社會的な商品的な技術にはなれなかつたと思ふ。それでさういふ商品的技術の上に今迄の詩人といふものゝ座がある。

尾形　兎に角技術といふものは、さういふ場合のものは一番自分の表さうとするものに近く現れるやうに努力することでせう。さうでないのですか。

北川　努力といふよりは効果と云ふべきでないか。努力しても現れなければ駄目だからなあ。

尾形　だからその人はまづいといふことになるのではないか。

萩原　さういふ意味に於て龜ちゃんの詩なんか非常に龜ちゃん的技術に於ては大したものではないのですか。

北川　あれは技術としては立派な技術ですよ。

萩原　また草野心平だとかね。

尾形　兎に角僕の書かうとするものを書く爲には、いくら近くだつて構はない。

宮崎　岡本のまづい技術といふのも大技術として最後の効果を獲得すればいい。

萩原　岡本君の詩がまづいといふのも、紙屑よりももつと悪いといふ意味のまづさではちつともない。僕はもつとかういふヂカなものが誰にも作られなければならないと思ふ。只、その後の問題として岡本のケツを引つぱたく爲に、まづいと言つただけだ。それは誰でもケツを引つぱたかなければ駄目だと思ふ。まづい詩がいゝといふことは絶對にないのだから。

北川　しかし、これからの詩人は單に立派な技術を持つてゐても、その表現しやうとする對象がつまらなければ結局何んにもならない。

萩原　もつと素材的に進んで行くでせうね。素材はどういふものが組み立てられるか、どういふものがあるかといふことが、胸に締めくくりが無い限りは、またその素材も本當に生きて來ないと思ひます。だから我々が素材に近付いて行かうとするには。

岡本　僕は詩のデツサンといふやうなものを考へて居る。それは結局僕等の仲間で詩をかく連中の範囲内で云ふ場合、僕の云ふデツサンといふものは、一つ一つの思想的訓練といふか、單に言葉だけでないもの、さういふものが足らないために非常に物足らなさを感じさせるやうな氣がするのだ。

尾形　しかし僕は題材の撰擇といふことは、僕自身はほとんど

しない、例へばツエツペリンを見たからツエツペリンの詩を書くといふことをしない。それらのことはむしろ嫌いてゐる。團扇なら團扇を持つて居る僕は、かう横になつても團扇を持つてゐるのだけれども、唯、「僕は團扇を持つてゐる」「こんな風に團扇を持つてゐる」「團扇を持つてゐる」ぢやつまり何のことか分らないですからね。（團扇のところになつて何のことか我ながら何のことかわからず）

萩原　題材を假定だてる必要はないよ。プロレタリヤの詩が留置場ばかりを使はなければプロレタリヤの詩だといふやうなことは少しもないから。

田中　だん〳〵唯物的になつて居ることは事實でせう。

萩原　素材は社會にザラに轉がつて何處にでもうなつて居ると思ふ。それの取り上げ方はその詩人の生きる事によつて決定されるでせう。

尾形　昔の詩人が夕陽を見て「夕燒けぶる」云云――とやつたやうな、その言ひ方はなんだか腹が立つてしやうはないといふ具合に、だん〳〵變つて來たことは事實ですね。

宮崎　素材は今後益々書く詩人の體質的なものになつて來てゐるね。

尾形　これからでなくて、事實いまさうでないのですか。

北川　大體生活環境になるね。

尾形　だから生活環境は誰にでもあるのだから、その中の一ツの生活環境に含まれるその仲間の中では體質なんかでも違つて來る人がある。

――さういふ意味で不思議なものは、酒を飲むといふことだ。

宮崎　これも體質から言ふと當り前でちつとも不思議でない。（哄笑）

尾形　だから僕は酒といふものを餘り直接に考へて居るからかも知れないのです。飲み物として水やなんかと同じやうに考へれば、この水は醉ふ水といふことにしかならない考へ方もあるのですけれども。（哄笑）

田中　どうですか、もつと論旨がありますか。

尾形　もつと窘められるやうな話だといゝですね。

田中　ではこの位にして、どうもいろ〳〵有難うございます。

【掲載誌】

「詩神」（第六巻八号、一九三〇年（昭和五年）八月、一三八～一五一頁）

※本文は傍点、括弧も含め、原文通り。

尾形亀之助と北川冬彦

――「詩神第三回座談會」から見る「童心」論争――

背景としての「童心」論争

昭和四年十一月「詩神」誌上で北川冬彦は尾形亀之助の第二詩集『雨になる朝』（誠志堂、昭和四年五月）をして、「詩集『雨になる朝』にあらはれた尾形龜之助は、季節の移り變りや、日差

しの濃淡や、庭や垣の氣配、雨だの、煙草だの、すべて靜かな、細かい日常に、魅力を感じてゐる。（魅力を感じなければ、その風なものを詩にまで表現するわけはない。）」（「詩集「雨になる朝」について」）[5]と評し、「生れ落ちるなり、あらゆるゆたかな環境を以て生長して來たなら、どんな人間でも、童心をもたないわけはない」と原因と過程まで推測した上で、尾形の詩の本質を「童心」と批判した。「僕は、今日に於ては「童心」をもつてゐることは、詩人としてむしろ恥づべきものではないかとさへ思つてゐる」と述べた北川に対し、尾形は反論文「童心とはひどい」（「詩神」第五巻第十一号、昭和四年十一月）を発表している。

思ふに、現在では「童心」とは田舍の小学校の先生が童謡などのセイ作の折りに「苦心」するそれを指して言ふべきであるかも知れない。が、全く、如何なる場合に於いてももはや現在のわれわれの間には「童心」といふ言葉がほめた意味では存在しないことは、北川君の「童心」をもつ詩人は旧いと言つてゐることに同じなのであるが、彼の言ふところの「童心」が詩集「雨になる朝」のどこに発見し得るといふのであらう。私は自分の芸術を新らしいと思つたことは一度もないのであるから、旧いと言はれることに何の反感ももたない。が、それが「童心」の故であるとあつてはいささか反駁をなさゞるを得ない。（中略）私は北川君には詩がわからないのだといふあくたれをきゝたくない。「童心」といふものを嫌ふ意味に於ては私も北川君にまけないのであるから、間違つても「童心」などと言つてほしくないのだ。（引用は『全集』増補改訂版に拠る――引用者注）

尾形は詩人に於ける「童心」の語感に拘り、北川に詰め寄った。「童心」という一語への観念が、尾形と北川の間にある壁を浮き彫りにするまでに到った要因が「童心とはひどい」の後半部である。

この一文が「詩と詩論」に言及するのがいやだからいやなのであるが、その頃流行といふことにはならなかつたが（それだけよかつたのであるが）六七年以前に、私は今年の二科会などの超現実主義的と言はれる作品よりもつとさうである仕事をしてきてゐるのだし、「詩」作にも現在の「詩と詩論」の同人諸君の作品のそれに同じいものをして来てゐる。こんなことをわざわざ言ふことはテレ臭いことであるが、私が彼等より新らしいと言ふ意味にではなく、私がもう種痘をしてゐるといふ意味でのみ述べてゐる次第である。（中略）／「詩と詩論」の運動が現在のやうな影響を他にあたへてゐることはかつて短詩型の運動が何時もともなつてゐた「困つたこと」と同じことであることを残念に思つてゐる。そして、この一文が私の愚かさや学問のないことをさらけだしたことにとゞまるといふことになる方がよいのであつて、更にお互（？）がこれにわをかけた愚か

さをばくろするが如き論争になることを私はさけたいのだ。（私はそれを北川君よりも春山君へより多くを希望する。）

北川冬彦は「詩と詩論」創刊時の同人であり、同誌に第七冊（昭和五年三月）まで欠くことなく寄稿している。尾形は昭和四年十月に「詩集『鶴』を評す――主としてその読者のために――」（「氾濫」昭和四年十月）の中で、室生犀星の詩集『鶴』を評した文章の「詩と詩論」での掲載を春山行夫に拒否されたことを明かしており、当時まだ「詩と詩論」に作品を発表していた北川からの批判を、「詩と詩論」からの不適格の宣告と受け取らざるを得なかったのは理解出来ることであろう。北川は更に「詩集「雨になる朝」について」と殆ど同文の「「雨になる朝」について」を「雑感一束」として「詩と詩論」第六冊（昭和四年十二月）に発表しているのである。しかし「尾形龜之助に答へる」（「詩神」第六巻一号、昭和五年一月）で北川は、「童心とはひどい」を「呂律の廻らない酔漢の愚痴」と一蹴した上で、「一番滑稽なのは、僕のあの批評と直接關係のない「詩と詩論」にアクタイついていることである」と、「詩と詩論」との距離を主張した。「詩と詩論」が「あの批評と直接關係のない」ということは、北川の「今日に於ては「童心」をもつてゐることは、詩人としてむしろ恥づべきものではないか」という言葉や、尾形が北川の言葉を要約した「「童心」をもつ詩人は旧い」という言葉も、新旧の基準は「詩と詩論」にないこととなる。北川は当時の動向を『北川冬彦詩集』（寶文館、昭和二十六年九月）の解説で振り返った。

昭和四年と云えば、當時は、それほどのものとも考えず無我夢中でやっていたのであるが、今日から見ればたしかに現代詩の二大源流の一つとして動かせない季刊誌「詩と詩論」發刊第二年目である。これは、春山行夫と私が中心となって、當時の新鋭をすぐって、エスプリ・ヌウボオ（新詩精神）によるポエジイ運動を起した機關誌である。私は專ら「新散文詩運動」を唱えて詩形式の變革に大童だった。（中略）詩集「戰爭」の巻末に近い「光について」「花」「人間」は、シュウルレアリスムの影響によって書いたもののようである。しかし、私はこれらの詩風からすぐ脱却した。この世界は住むに耐えないところであった。[6]

常に変革を求める当時の北川の姿が判然とする。さらに、「「戰爭」を書いたのは昭和四年以前であり、「新散文詩運動」を提唱したのは「詩・現實」（昭和五年六月～昭和六年六月）創刊以前「詩と詩論」時代のことである。「新散文詩運動」を提唱して「詩と詩論」の運動に訣別したのではなく、「新散文詩運動」推進の結果、「詩と詩論」との訣別を來したのである[7]」と、自身の転換について内面に即して語った。当時の尾形の様子については妻の尾形優が「昭和四年五月、第二詩集「雨になる朝」を刊行致しました。その前年の年の暮、私は彼と一緒に暮す様にな

りましたが、その頃から彼は次第に詩作しなくなり、多くの詩友とも故意に遠ざかつて行きました[8]」と記しており、同時代の詩人達との交友が目に見えて減ったことが窺える。「詩・現實」がまだ創刊を迎えていない時期に、北川が、作品発表を続けている「詩と詩論」と訣別しているなどということを尾形は知る由もないだろう。事情を把握した上で尾形が書いた「馬鹿でない方の北川冬彦は「読め」」（「詩神」第六巻第二号、昭和五年二月）は、既に「童心」論争が二人の詩人の詩論による違いによって起きたであることが明瞭となるのである。

殊に俺に何か言ふならもつと用心することだ。その方が君の得ばかりではない。も一つ注意するが、あまり自分を偉く思ひこんでしまはぬ方がいゝ。君が左傾しやうがしまいが、さうしたことを一つの見えなどにしては今どき甚だ滑稽なことでもある。俺がたまたま酒を飲むといふので「酔漢」などの文字を使つてゐるのだらうが、俺が酒飲みであれば尚のことこんな文字を使ふには用心をしなければならぬのだ。（中略）「詩と詩論」に及んだことが、君がこの頃せつかく「俺は超現実主義ではない、俺は左傾といふことをするのだ」――と言つてゐるそれの邪魔をしてわるかつたわけだ。兎に角君は君の望んでゐるだけ早く偉くなることだ。君は偉いといふことをつまらぬことだなどと思ふやうになつてはいけない。北川よ、反省などをしてはいけない。[9]

論争によって尾形の詩心が姿を現した時、そこにあるのは、語が詩人に根ざしているかという北川への糾弾である。実際に酒客である尾形に向かって放たれる「酔漢の愚痴」という言葉は詩人が用いるまでもない一義的な語に過ぎず、皮肉も孕まない、北川による〈矛先の変換〉となるだろう。尾形は北川の側から発された「童心」、「酔漢」への拘泥を見せることで、詩人が〈語〉に手を伸ばす際、そこに憚りがなければならぬことを言外に訴えた。〈語〉への執着は尾形の詩作の態度であり[10]、〈語〉の結晶である紙面の詩は唯一無二の「詩」（ポエジー）表現である。紙上の詩が「詩」とされることよりも「詩」が詩となることが尾形の詩論を構成する時、〈語〉に手を伸ばすことに憚りのない詩人は、詩によって「詩」とされる詩論にも飛び付くことが尾形の中で懸念されたのではないだろうか。

「詩神第三回座談會」をめぐって

「詩神第三回座談會」の中の「だから一九三〇年といふ年にかういふものがあるといふ私の考へ方は、あなた方にとつてそれどころではなく、これを最も尖端的なものであると主張して、誰でもがやらなければいけないといふ考へですか」という言葉は、「題材」や「技術」以前の問題を〈詩人〉として北川に投げかけた尾形の直球の問いである。北川は「新散文詩運動」においても、「詩人は、今日一度はかならず「新散文詩運動」の

先禮を受けなければならぬ。これは、今日の詩人としての必須條件である」（「雑感一束」―「明日の一形式」、「詩と詩論」第六冊、昭和四年十二月）と述べている。「童心」論争も経た尾形から見ると、北川は、新たに運動を提唱しても変革されるのは外装のみであり、「尖端」の自負とそれを周囲へ押しつける態度はそのままの、内容変化のない改革者であった。

「第三回座談會」が掲載された「詩神」同巻同号に尾形は「詩集　軍艦茉莉」という批評を寄せている。安西冬衛の第一詩集『軍艦茉莉』（厚生閣書店、昭和四年四月）への好評を記したもので、「第三回座談會」と同時期であることが顕著となる文面になっている。

詩集軍艦茉莉には北川が序を書いている。北川の詩集戦争の中には沢山のあのグロツスの絵の焼き直しの如きものを散見するが、安西の作品の短いもの（詩集の中にはあまりない）にはパールクレーの絵に似たものが相当にあつたやうに記覚する。私の作品を童心云々と罵つた北川への返礼と解されるもよしなきことではあるが、前者は全く下手なものまねに終つてゐるが後者はそれが一個の詩境として立派によい作品をわれわれに見せてゐる。（中略）彼のものはわからないといふのであまり人々の注意を引かなかつたが、最近に到つて「安西」と言へば「よい詩」を書く人といふことになつてしまつてゐることは慶賀すべきことであるばかりでなく、かく一般にまで詩といふものの一歩の進みをもたらせた人として敬意を表すべきである。即ち未来派の初期の作品そのままの張り紙細工の如きシネ・ポエムなどといふものと、彼の作品を同一視してはならぬ所以である。[11]

「童心」論争に触れている点や「シネ・ポエムなどといふもの」と北川を揶揄する言葉を用いて安西との違いを主張し好評を為す箇所に、「第三回座談會」の片鱗が見え、この時期の尾形の頭には北川との詩想の相違が強く認識されていることが分かる。尾形がパウル・クレーを愛したことは住谷磐根の「然し、尾形の作品は素晴しいと感激に値するものであった。未来派から出発してモンドリアン風でもあり、三角を組み合わせた構成の、不可思議に美しくするどい感覚だと想った。隣に住む門脇（門脇普郎―引用者注）の作品は、パウル・クレーが好きだという話であったが、尾形の影響が多く、女性的な甘い色で、美しい絵だと私は思った」[12]という言葉や、村山知義の「尾形君は当時私を通じて、その絵の写真のいくつかを見たパウル・クレエに感動していた」[13]といった絵画活動期の仲間の回想にも確認出来る。村山は続けて、「パウル・クレエは私のいたころ、ドイツにその名を僅かに知られ初めていたスウイスの画家である。尾形君の絵は主にパステルで厚紙に描かれたものであったが、いかにもノビノビした、ごく単純で、しかも優雅な、極めて個性的な、主として色の直線の交錯した絵であった。それはいかにも女性的で、しかもシンの据ったような、だが、やっぱ

りフワフワした流れて行ってしまいそうな絵で、彼の詩と全く同一の心から動いて出て来たものと思わせるものだった。／そういう点で、どちらかといえばドイツ的で、理論的であった私とは全く対蹠的だった」と、表現媒体が異なっても絵画と詩に渡って通じる尾形の詩想を指摘し、自身とは相対する芸術観であったことを振り返った。敬愛する画家について村山は「ゲオルデ・グロッスは、レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロやデューラーやクラナッハやセザンヌやゴッホやと並べて、私が最も尊敬する畫家である」[14]と述べており、デューラー、クラナッハ、グロッスのドイツ人画家の中、同時代に生きたグロッスは先の文章の「ドイツ的」を代表する者として見て良いだろう。『軍艦茉莉』批評の一文に尾形が用いた「グロツス」は北川と「対蹠的」であることを暗示させるのみに止まらず、「童心」論争の根本は北川の批判にあるのではなく、詩想自体の齟齬から来したものであることを主張しているのである。

尾形は「傷ましき月評」の中で「不幸なことにわれわれは「詩型」によつて書かれてゐるが故にそれを詩と言はなければならないことになつてゐる。もつと不幸なことに詩とはいはゆる詩型のことになつてゐる」と述べ「私は詩型で詩はかけないから書かない」と明言した[15]。座談の中「シネ・ポエム」の技巧について論議し「イヤそれは僕のは多少（惡口批評の意味がは入つて居るのです）」と非を認めることとなる話題を尾形が自ら持ち出したのは、「シネ・ポエム」の内容についてではなく、「かういふものが一番新しいといふやうな、さういふ詩に對する態度は餘りいゝものではない」ということが言いたかったからであり、更には座談会の後に書き加えられた箇所の「出來上つてゐない」という肝要な主張が待機されているからであった。尾形が引っ掛かりを覚えた「詩・現實」の広告文には「これは一九三〇年の世界の眼であり頭脳であると共に明日を創り出す手である!!」という文句の他に「最尖端藝術の創造と批判」とあり、加えて横光利一、佐藤春夫、伊藤整ら執筆者の名を並べ「堂々たる執筆諸家の顔觸れを見よ！」と書かれている[16]。かつて尾形が「詩集「鶴」を評す」の中で室生犀星を相手に「しぶ味のある着物を着たゝめに、その人がしぶ味のある人間になるのであつたら、その人は人といふより着物に近いものなのであるだろう」[17]と言って批判した、「詩」を二の次に世評の価値基準で体裁を整える方法が「詩・現實」の広告文にも見受けられるのである。広告文の一語一語に詰問し「詩に對する態度」を問う姿に「詩」を掌中で眺め得ず、掴みきれない大きなものとして畏敬を抱く尾形亀之助自身の「態度」を見る。「私は「詩」を詩と言ひ得ない場合が多い。殊に言葉に言ひ表はす多くの場合は「詩といふもの」と言はなければ十分に言ひ表はせない」（前出「傷ましき月評」）というように、尾形にとって「詩」は未完であることで「詩」として在り、詩を持ってしてでも「出來上」がることのないものなのである。完成することのない「詩」に詩が重なるよう、言葉と詩想の距離を近づけるために詩人がすべきことは、言うまでもなく「詩」に近い詩を書くことである。「第三回座談會」が掲載された「詩神」と同じく、昭和五

年八月に出版された尾形の最後の詩集『障子のある家』の詩篇「学識」は、雨天時に作者が「裸なら着物はぬれない」ことと「雨は水なのだといふこと」、「雨が降れば家が傘になつてゐるやうなものだといふこと」を発見したことが書かれ、「しかし、あまりきまりきつたことなので、私はそれで十分な満足はしなかつた」と結ばれる。改めて発見した〈当然〉を、「学識」と名付けながらも感慨なく噛み砕き、作者は自身の輪郭をなぞる。滑稽から悲哀への一連を雨が包むことで瞬間と永久に結ばれた詩想は詩として封がされ、受け取る読者は無二の一日の混沌が無化される事実に困惑する。感情を滲ませない尾形らしい散文詩である。「学識」の冒頭一段落は尾形の詩境が呼応する。

自分の眼の前で雨が降つてゐることも、雨の中に立ちはだかつて草箒を降り廻して、たしかに降つてゐることをたしかめてゐるうちにずぶぬれになつてしまふことも、降つてゐる雨には何のかゝはりもないことだ。[18]

雨の下で何を為しても、雨の主体となり客体に対する〈加減〉や〈選択〉を施すことは不可能であり、「尖端的」な「新しい」雨粒に変えることも出来ない。「詩」が存在するのであれば、どのような詩を書いても「詩」は微動だにせず在り続けるだろう。北川冬彦は自身の詩業を「ぼくが詩を書きはじめたころは、はからずも明治大正の詩の変動期で、ぼくは何よりも詩の形式の変革を目ざし、やがて詩の内容の変革にまで及んだ。顧みると、ぼくは現代詩の発展にそって歩んできたといえそうである」と振り返る[19]。「現代詩の発展」に添った一人の詩人として北川冬彦の姿があるならば、その一方に「詩」を眼差し続け、語を選ぶことに徹底して動かなかった尾形の姿がある。尾形亀之助が「どうすればよい詩が書けるか。といふことの方が、詩型のことや形式のことなどよりもはるかに作者にとつて大切ではなからうか」[20]と呟くのは、「どうすればよい詩が書けるか」を考え「詩型」や「形式」という方法がその解答から滑り落ち、未だ「どうすればよい詩が書けるか」を考え続けている事実が詩人である、自身の事実であるからである。詩作は〈効率〉や〈大量生産〉を目指す〈作業〉ではないから、方法ではない〈何か〉を模索し「詩」への接近を願う。未だ「出來上つてゐない」ものを知るために方法を用いずに心を研ぎ澄ますことが「詩」であり、尾形が執った「詩人の社會的態度」であったのである。

おわりに

「詩神第三回座談會」は前半に「詩人の社會的態度」について論じ合い、田中喜四郎の進行によって後半の「轉形期」における「詩の形式」と「取材」に主題が移っていく。前半部に於ける萩原恭次郎の「エライと云はれる人が、社會的に偉くなつたといふ社會と、さういふものをちつとも偉く思はないもう一つの社會的なものがあると思ふね」という発言は、直前の尾形の「さういふところに出演する機會のない多くの詩人にとつて、そ

れが彼等を代表する一つの對社會的な現れではないのですかね」といった主張を的確に要約したものと言える。短い生涯にアナーキズムを貫いた萩原は詩作の題材も社会から離れることがなかった詩人であり、「第三回座談會」は主題の性質もあり、司会役の田中喜四郎がいながらも恭次郎によって話の要点が掴まれ、展開していく。平戸廉吉に共鳴し自身も詩に罫や字体の変化を組み入れた萩原恭次郎と、短詩における行替え以外には視覚的効果に頓着した様子が見られない尾形の詩の形式の違いは明瞭であるが、座談の中、根本的な詩論において両者の間に不一致は見られない。恭次郎は「詩に関する断片」の中で同じ時代に生きる詩人たちについて「自分は官選の詩の役人でもないし、誰に属目するかといふやうな性質を帯びたものでもなく、自分がその詩に力を感じたのは、無言の中にその人と握手をした事なのだ」と語り、「君達は君達に自由に君達の理想に驀進して呉れ。これが最大の希望だ。また相互の合言葉でもある」と記している[21]。各々の場で「理想に驀進」することは、常に「出來上つてゐない」ものを追い続けることである。「詩」はなぜ「理想」であり完成を迎えないのか、人間が「時間のふさぎ」であると悟った[22]尾形が、座談中、詩人が虚無と背中合わせに在ることを漏らす。

だから、さういふ意味でいふと、つまり今迄に殆ど何千萬といふ詩があるわけでせう。その中でどの位が殘つて居るといふこと（有機的無機的のすべてをふくんで）も興味のあることだし、又これから先に時間が無限にあるわけでせう。さうすると又それが殖えて行くに違ひない。けれども殖えて行つてもそれは結局何にもならないことになるのですけれどもね。

時間こそが、新旧に拘泥する詩人が抗い、その度に素知らぬ顔で通り過ぎていく「雨」である。時の移ろいと共に変化する「詩」は定義された詩で蔽うことは出来ないが、瞬間に寄り添った詩は、絶対無二の瞬間と結ばれ存在し続ける。恭次郎が詩に於ける技術を「誰もが一番近く自分に持つてゐる、その心臓と紙の上の一番近いところにあるものを獲得する技術」と言い、尾形はその「技術」を「兎に角技術といふものは、さういふ場合のものは一番自分の表さうとするものに近く現れるやうに努力することでせう」と、「技術」でありながらそれを恒常的な「努力」そのものと言い換えた。二者の技術論が通じ合う中、北川が「努力しても現れなければ駄目だからなあ」と漏らせば、「詩人の骨」[23]を自負する尾形はすかさず「だからその人はまづい」と言い、詩人であることの厳しさを示した。技術を詩型に固執し外装から整えた詩の視覚的な〈新しさ〉は〈古さ〉を未来に約束されるものである。「何んとかしなければ詩は余技になつてしまふのだ」[24]と述べた尾形であるからこそ、錆びていき「結局何にもならないことになる」〈新しさ〉を狙う詩作を批判し、文筆では明かさなかった、詩人にのみ許され、課せられる「努力」を口にしたのである。

「詩神第三回座談會」記録は七名の詩人が社会と詩を同等の重きで語り、詩の「題材」から、詩一篇の一語までを取り上げた議論が見られる、当時の詩人たちの詩業を知る貴重な資料である。本稿では、尾形亀之助と北川冬彦の「童心」論争に関連し、二者が直接に対話している「第三回座談會」を踏まえて考察した。北川との詩想の相違から、「よい詩」を書く「努力」の場に立ち続けることで為してきた「詩に對する態度」が尾形の社会に対する態度であったことが認識されるのである。

【注記】

1　編者である秋元氏が最初の『全集』を指す際〈『尾形亀之助全集』（一九七〇・思潮社）〉と表記するため、本稿中の『全集』の出版年は西暦で記した。

2　『尾形亀之助全集』（思潮社、平成十一年十二月、五九一～五九二頁）

3　注2に同じ。

4　座談会出席者の略歴を以下に記す。

尾形亀之助（一九〇〇～一九四二）

宮城県柴田郡生。未来派画家として芸術活動を出発したが、第一詩集『色ガラスの街』（惠風館、大正十四年十一月）刊行の頃より詩人へと転向。「銅鑼」や「亜」といった詩誌の同人となり、自身も「月曜」を創刊し、全詩人聯合の発起人となる等精力的な活動を見せるが、第三詩集『障子のある家』（私家版、昭和五年八月）刊行以後、詩人仲間との交友を避け、昭和七年に帰郷。他界する昭和十七年まで詩作は止まなかった。

萩原恭次郎（一八九九～一九三八）

群馬県勢多郡（現前橋市）生。若い時から短歌に親しみ「文章世界」などに投稿。大正七年川路柳虹の「現代詩歌」に参加、翌年詩話会編の『日本詩集』大正八年版に作品が収録される。平戸廉吉の「日本未來派宣言運動」の影響から前衛的な詩活動への意識が芽生え、詩誌「赤と黒」の創刊や「ＭＡＶＯ」同人としての活動を経て、帰郷後の昭和七年「クロポトキンを中心にした芸術の研究」を発刊したが、昭和十年以後、民族主義に共鳴していく。短い生涯の中に『死刑宣告』（長隆舎書店、大正十四年十月）、『断片』（渓文社、昭和六年十月）の二冊の詩集がある。

北川冬彦（一九〇〇～一九九〇）

滋賀県大津市生。七歳で渡満し少年期を過ごす。旅順中学で同級であった城所栄一、富田充に誘われ翻訳活動をこなしたことが縁となり、大連で安西冬衛も加えた四人で「亜」（大正十三年一月）を創刊、更に東京で城所、富田と共に「面」（大正十四年一月）を創刊し、これらの活動が短詩運動の中心を占めていく。その後、詩の形式の革新を常に意識し「詩と詩論」投稿時から新散文詩運動を提唱。芸術主義が色濃い「詩と詩論」を離れ社会を眼差し「詩・現実」（昭和五年六月）を創刊した。戦後も、詩現代詩人会初代幹事長となり作を始めとする芸術活動に意欲的に牽引し、生涯の軌跡は常に尖端の意識に根差したものと言える。

岡本潤（一九〇一～一九七八）

埼玉県児玉郡（現本庄市）生。青年の時よりくロポトキンを愛読、アナーキズムに共鳴し日本社会主義同盟に参加する。大正十年頃より詩作を始め、以後「赤と黒」（大正十二年一月）、「ダムダム」（大正十三年）等の詩雑誌を創刊し、社会主義的な立場で詩活動を続けた。戦後もアナーキズムを貫き、その姿勢が岡本の詩と一体となって今日の読者に刺激

を与えるところとなっている。

田中喜四郎（一九〇〇～一九七五）

広島県広島市生。田中清一とも称す。実家は地主であった。「詩神」（大正十四年九月～昭和六年十二月）は田中が詩壇の公器を目指して創刊した雑誌であり、その目論見通り、流派を問わない寄稿者と、詩、散文、研究、翻訳等、ジャンルの彩りにも長け、多くの詩人の発表の場を確保した。詩集は戦前の田中清一の名で発表した『永遠への思慕』（富士印刷出版部、大正十四年八月）等があり、戦後も原爆への怒りを歌った『苦悶の花』（国文社、昭和三十七年七月）等を刊行している。

杉江重英（一八九七～一九五六）

富山県富山市生。大正九年、早稲田大学英文科を卒業と同年に宮崎孝政、瀬川重礼らと詩誌「森林」を創刊、編集代表者となり積極的に活動する。ニヒリズムが生活描写に投影された作風で、詩集に『夢の中の街』（森林社、大正十五年十月）、『骨』（天平書院、昭和五年九月）などがある。

宮崎孝政（一九〇〇～一九七七）

石川県鹿島郡（現七尾市）生。七尾中学校を中退以後、小学校で教鞭を執りながら詩作を続け、「現代詩歌」「帆船」等に作品を発表する。大正十一年に「森林」同人となり、大正十五年処女詩集『風』（森林社、大正十五年九月）を刊行。昭和三年からは「詩神」の編集を担当した。詩集は他に『鯉』（鯉社、昭和四年九月）、『宮崎孝政詩集』（天平書院、昭和六年一月）がある。

※詩人略歴は『萩原恭次郎全集第三巻』（静地社、昭和五十七年十月）、『日本現代詩辞典』（桜楓社、昭和六十一年二月）、『尾形亀之助全集』（注2に同じ）、『現代詩大事典』（三省堂、平成二十年二月）を参照した。

5 北川冬彦「詩集「雨になる朝」について」（「詩神」第五巻十号、昭和四年十一月）

6 北川冬彦『北川冬彦詩集』（寶文館、昭和二十六年九月、三二二～三二三頁）

7 注6に同じ（三二五頁）

8 尾形優「尾形亀之助のこと」（『現代日本詩人全集12』創元社、昭和二十九年四月、三二六頁）

9 尾形亀之助「馬鹿でない方の北川冬彦は「読め」」（注2に同じ、三六六～三六七頁）※初出「詩神」第六巻第二号、昭和五年二月［傍点引用文］

10 「〈語〉への執着」については拙稿「尾形亀之助はなぜ書くか――『尾形亀之助全集』未収録資料の紹介と中村漁波林・黄瀛をめぐる詩壇一端の考察――」（「九大日文18」平成二十三年十月、三十頁）に「語句への拘り」として考察を行った。

11 尾形亀之助「詩集　軍艦茉莉」、（注2に同じ、三六七～三七六頁）※初出「詩神」第六巻八号、昭和五年八月

12 住谷磐根「尾形亀之助のこと」（「尾形亀之助」六号、昭和五十一年一月）

13 村山知義「尾形亀之助遺聞」（「尾形亀之助」七号、昭和五十一年三月）

14 村山知義『グロッス』（八月書房、昭和二十四年十二月、一頁）

15 尾形亀之助「傷ましき月評」（注2に同じ、三三九～三五〇頁）※初出「詩神」第五巻第七号、昭和四年七月

16 「詩神」第六巻第七号、昭和五年七月

17 尾形亀之助「詩集「鶴」を評す――主としてその読者のために――」（注

2に同じ、五〇八～五一四頁）※初出「氾濫」再刊号、昭和四年十月［傍点引用文］

18　尾形亀之助「学識」（注2に同じ、一五六～一五七頁）※初出『障子のある家』昭和五年八月

19　北川冬彦『詩のアンソロジー』（時間社、昭和四十七年二月、八四頁）

20　尾形亀之助「さびしい人生興奮」（注2に同じ、三三七～三三八頁）※初出「詩と詩論」第四冊、昭和四年六月

21　萩原恭次郎「詩に関する断片」（『萩原恭次郎全集第三巻』静地社、昭和五十七年十月、一八三～一九二頁）※初出「詩神」第五巻一号、昭和四年一月

22　尾形亀之助「因果の序」（注2に同じ、二四三頁）※初出「詩神」第六巻第八号、昭和五年八月

23　尾形亀之助「詩人の骨」（注2に同じ、一四八～一四九頁）※初出『障子のある家』昭和五年八月

24　尾形亀之助「漫筆御免」（注2に同じ、二八〇～二八三頁）※初出「詩壇消息」第一巻第四号、昭和二年四月

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程一年）